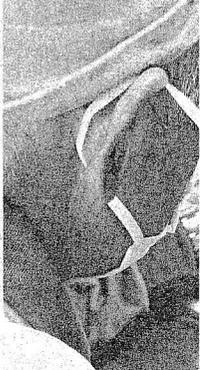


# 身元特定

## 災害で犠牲 家族の元へ

写真や遺品を眺めながら、突然失踪した妻や、友人との思い出を振り返る男性  
11月、埼玉県富士見市



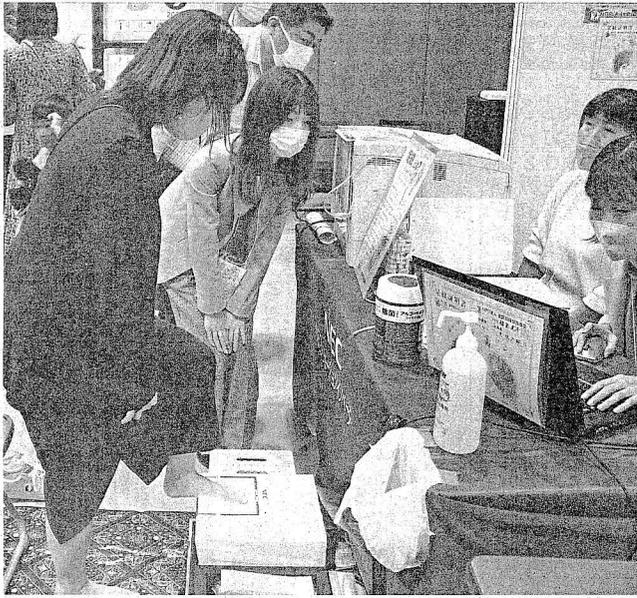
話があった。警視庁で身元不明遺体の身元を専従で特定する鑑識課「身元不明相談室」の捜査員からだった。29年11月下旬に東京都板橋区の新河岸川で見つかった女性の遺体が、妻ではないかとの連絡だった。自

約1カ月後、DNA型鑑定で兄の遺体と確定し、特定につながった。捜査員が男性を特定した決め手は鼻の形とホクロだった。「遺体の鼻や耳は死後も形が変わりにくく、腐敗が進んでも特定につな

肉や皮膚の厚みなどは医学的な統計値を参考に肉付けする。体形は、着衣や捜査で得た生活状況の情報を総合して判断する。加藤巡査部長は「似顔絵が身元特定につながる一助になってほしい」と話した。

大災害などで犠牲となった人が、遺体として発見されたものの身元の特定ができず、遺族の元に帰れないケースがある。遺体の損傷が激しいことが理由だが、これを防ぐための新たな手法として注目されているのが「足紋」だ。指紋と同様の凹凸や模様を形作る足紋は一人として同じものがなく、損傷も免れやすい。こうした特徴を身元の特定に生かそうと取り組むNPO法人「全国足紋普及協会」(東京都)のイベントに参加し、足紋採取を体験取材した。

(弓場珠希)



足紋はガラス台に足をのせるだけで採取可能で、わずか1分弱で完了した。神戸市中央区

# 足紋に注目

## 指紋より損傷免れやすく高精度

10月、神戸市内で初開催された国内最大級の防災イベント「ぼうさいこくたい2022」。防災啓発の展示などが並ぶ中、同協会が足紋採取の体験会を開いていた。ブースに置かれていたのは、1台のスキャナー。この機器のガラス台で足紋を読み取るのだという。靴下を脱ぎ、ガラス台に足をのせてぐっと踏み込む。時間はほんの数秒。1分弱で両足分の採取が完了した。足紋には指紋と同様に交

わったり、途切れたりする「特徴点」と呼ばれる場所がある。特徴点の1千カ所以上が指の付け根あたりに集中しているといい、このうち12カ所が一致すれば同一人物とみなせる。足紋を鑑定してもらおうと、左足に726、右足に691の特徴点があった。特徴点が多いほど個人の識別がしやすいのだという。足紋は、簡単に短時間で採取でき、コストがかからない。特徴点の数が少ない指紋と比べ、本人特定がしやすく、精度も高い。なにより採取されることへの心理的な抵抗感が小さい。足の裏は、靴や靴下で守られていることが多いため、損傷しにくく、水の中

で亡くなるなどしても、その特徴点は変わらないそう。足紋にも課題はある。現状は、警察など捜査機関は個人情報のため取り扱うことが認められておらず、データベース化されていない。あくまで管理は個人に委ねられている。

「存在知って」 認知度の向上も不可欠だ。同協会は、さまざまなイベントで足紋採取の体験会を開催しているほか、足紋採取の簡易キットを製作し、普及活動に取り組む。光眞氏は「まずは足紋の存在を知ってもらうことが必要」としたうえで、管理について「希望者を対象にマイナンバーカードにひもづけるなどし、自治体や医療機関が管理するのが理想的だ」と話す。杏林大医学部法医学教室の吉田昌記・学内講師は「足紋は機械で照合でき、時間や手間がかからず、精度も高い。大規模災害時への活用にも新しい可能性を感じている」と評価。「人の足紋を対象に認証のためのスマートフォンアプリなどが開発されれば、普及が後押しされるのではないかと話した。



症患者が徘徊した場面などでも役立つ可能性がある。元警視庁捜査1課長で、同協会の光眞章理事(74)によると、足紋採取を体験した家族連れが「何かあって家に帰ってこられないね」と話していたという。

「存在知って」 認知度の向上も不可欠だ。同協会は、さまざまなイベントで足紋採取の体験会を開催しているほか、足紋採取の簡易キットを製作し、普及活動に取り組む。光眞氏は「まずは足紋の存在を知ってもらうことが必要」としたうえで、管理について「希望者を対象にマイナンバーカードにひもづけるなどし、自治体や医療機関が管理するのが理想的だ」と話す。